

(資料紹介) 鎌倉市内遺跡の出土品 2

—報告書非掲載資料を中心に—

鈴木弘太 (文化財課 技術職員)

はじめに

本稿は本誌掲載の押木論考と同様の趣旨である。鎌倉市教育委員会には、過去 40 年以上継続して実施されてきた発掘調査資料の蓄積があり、数百冊の発掘調査報告書が刊行されている。膨大な調査資料は収蔵庫で保管されており、効率的な収蔵や活用可能資料の追選別などを目的とした出土品再整理事業が実施されている。本稿で紹介する遺物は、既に報告書が刊行されているものの、何らかの理由で掲載されなかったものであるが、出土品再整理事業の中で見いだされ、改めて世に紹介すべきと判断された資料である。なお、実測図は縮尺 1/3、写真は縮尺不等である。

事例 1. 北条時房・顕時邸跡出土の墨書かわらけ (図 1)

出土地点は若宮大路二の鳥居北方約 50m、若宮大路の西に面している鎌倉市雪ノ下一丁目 273 番口である (図 3-①)。調査は昭和 61 年に実施され、その成果は昭和 63 年 3 月に刊行された『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4』に収録されている。調査では 13 世紀から 14 世紀中葉の上下層の遺構群が報告されている。上層遺構群では、調査区東側で鎌倉時代から南北朝時代の若宮大路側溝が、西側では板壁掘立柱建物と呼ばれる長屋風の建物が発見されており、武家屋敷の裏手の状況と推定されている。下層遺構群では、若宮大路側溝より古い東西方向の溝が発見されており、若宮大路側溝の造営あるいは改修以前の構築物と考えられる (原 1988)。

台帳及び遺物実測原図を確認したところ、(特)と記された実測図が残されており、当時から特別な資料であることは認識されていたようだ。これにより、少なくともこの調査で出土したものであることは間違いないだろう。ただし、実測図には No.45 と記されていたものの、遺構台帳や遺物台帳とは合致するものはなく、詳細な出土状況は未詳である。

当該資料は、手づくねかわらけで、口径 12.5cm、器高 3cm で、口縁の一部を欠損する。残存重量は 179g である。焼成は良好で赤灰色から暗灰橙色を呈し、粗いクサリ礫と土丹粒、骨芯化石を含む。手づくねによる成型で、外底面には明瞭に指頭痕が明瞭に残る。器壁は最大 8~9mm とやや厚ぼったい。側面中位には深い横ナデが残る。器形からは 13 世紀第 2 四半期ごろのものと推定される。

この手づくねかわらけの内底及び外側面に墨書がある。内底には花押にも見える墨書 7 個が記されていた。いずれも同形と見えるが、大きさやゆがみ、墨の濃淡などの差異はある。また天地についても未詳である。この墨書については『花押かがみ』を参照したが、合致するものは見いだせなかった。

外側面にも墨書が記されていた。指頭痕と横ナデを跨ぐようにおそらく一字が記されている。文字の下半分の指頭痕に載る部分がかすれており全様は未詳で、判読もできない。

花押のような墨書が記された土器は、佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）や千葉地東遺跡などで出土している。ただし、何かの作法に則って記されたものとは考えづらく、饗宴の最中の戯書等、予想の域をでない。

事例 2. 名越ヶ谷遺跡出土の墨書かわらけ（図 2）

出土地点は名越ヶ谷の入り口、逆川の西岸に位置する鎌倉市大町三丁目 2353 番 2 外地点である（図 3-②）。調査は平成 19 年度に実施され、その成果は平成 30 年度に刊行された『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 34（第 4 分冊）』に収録されている。調査では中世から近世に至る河川と、それに伴う護岸遺構が発見されている（玉川文化財研究所 2018）。

台帳を確認すると当該資料は「No.15 08.1.18 河川 4 覆土上層」であることが確認できた。河川 4 は第 3 面の帰属とされており護岸を伴う。護岸の構築年代は 13 世紀前葉から中葉ごろと推定されている。

墨書かわらけは、ロクロ成型で底部に糸切り痕が残る。復原口径は 12.4 cm、復原底径 9.2 cm、器高 2.9 cm。遺存率は約半分、残存重量は 87 g である。焼成は良好で淡橙色から暗橙色を呈す、やや砂質の胎土である。器壁はわずかに内湾しながら立ち上がり、厚ぼったい。器形からは 13 世紀第 3 四半期ごろのものと推定できる。

かわらけの内底に 2 列の文字列が墨書されている。おそらくは外側から中心にむかって記されたとみえるが、判読はできなかった。

おわりに

本稿では、出土品再整理事業により見出された、報告書に掲載すべきであろう資料を紹介した。当該事業でも成果の活用が課題となっていたことから、わずかではあるが、世に出すことができたことは、有意であろう。現在でも鎌倉市内では年間 10 数件の発掘調査が実施されており、出土資料は膨大な数に上る。これらを余すところなく、社会に還元することは極めて困難であろうが、その努力は継続していきたい。

本稿の成果は、出土品再整理事業に従事している職員の日ごろの作業の延長である。感謝申し上げたい。また本稿執筆にあたっては、伊丹まどか、押木弘己、菊川泉には指導と協力を得た。改めて感謝申し上げたい。

引用参考文献

原廣史 1988 「1. 北条時房・顕時邸跡 雪ノ下一丁目 273 番口地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4』鎌倉市教育委員会

玉川文化財研究所 2018 「名越ヶ谷遺跡 鎌倉市大町三丁目 2353 番 2 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 34（第 4 分冊）』鎌倉市教育委員会

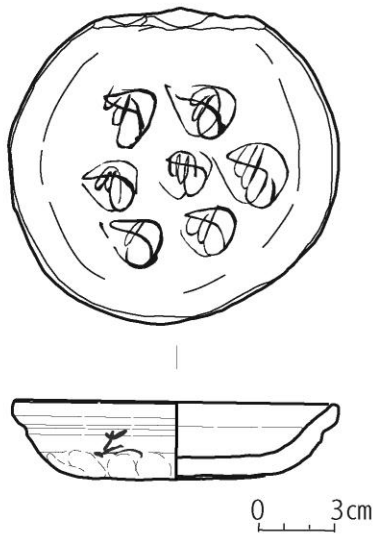


図1 北条時房・顕時邸跡出土の墨書かわらけ

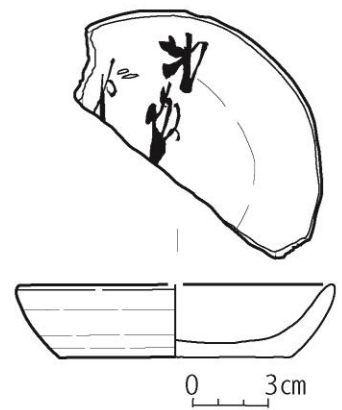


図2 名越ヶ谷遺跡出土の墨書かわらけ



- ①北条時房・顕時邸跡 (小町一丁目 273 番口地点)
- ②名越ヶ谷遺跡 (大町三丁目 2353 番 2 外地点)

図3 各事例の出土地点 (国土地理院地図をもとに作成)